

咲き誇った錦城生の花

2024 錦城祭開催



題字 井口 文章
再刊 第462号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2024

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面…今年の錦城祭も無事終了！
大盛況の2日間を振り返る
二面…復活から2年目の夜後祭
あの熱狂をもつ一度！

9月14日(土)から15日(日)の2日間にわたって開催された錦城祭。今号では、編集委員が見てきた各団体の企画の様子をお届けする。(編集部共同取材)

匠者のダンスを披露

ダンス部のステージ「ハナシズクノウタ」で行われた全13演目のうち最初の演目「万華」では、赤色のライトに照らされ、緩急のある情熱的な踊りを披露した。その後もキラのあるブレイクダンスの



息の合ったパフォーマンスを見せた

思わず震え上がる迫力！

3Aの企画は「太田医院」。病院が舞台のお化け屋敷だ。懐中電灯の光を頼りに、死者の潜む真つ暗な病院を自分の足で進んでいく。順番待ちの列に並んでいる時に教室の中から悲鳴が聞こえてきて、そんなに怖いかという不安と、どれほどの仕掛けがあるのだろうという好奇心で胸が高鳴る。外装には怪しげなお札や血の跡が、内装は手術室のプレートや病院のベッドがあり、本格的な仕上がりだっ



恐怖を煽る外装



店内では罵詈雑言が響く!?

インパクト大の飲食店

1Fは、話題を呼んだ「日本一接客態度の悪い店」として知られる「Lazy House」を、錦城バージョンで開催した。ドアの向こうはもう別世界。入った途端、空いているテーブルにつくように鋭い言葉が飛んだ。メニューがテーブルに投げ置かれ、メニューの内容も「おまえの心に穴をあけてやるよセット」「おまえの恋は叶わねーよセット」などなかなか挑発的な内容となっ

「来年ももっとワクワクさせたい」

実行委員長が見た今年の錦城祭

オープニングセレモニー、そこでの全校ダンスなど、初の試みが導入された今年の錦城祭。錦城祭実行委員長の中村剛月さん(2日)は、「新しいことを実施し大変でもありましたが、その分楽しくもありました」と感想を語る。



「皆の楽しむ姿が見られて嬉しかったです」

が、中村さんは、新企画に目を向けた分本部をまとめるのが大変だったと苦労を振り返る。企画紹介で行う内容を振り分けるのが大変だったほか、全校企画のダンスはできるかどうか不安と焦りは尽きなかったそう。

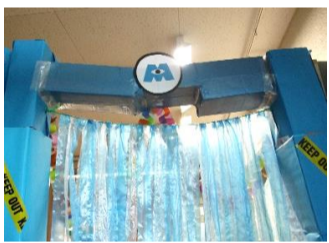
しかし、セレモニー後に多くの人がこれらの企画が良かったと言ってくれて、本部の

みんな「やってよかった」という気持ちになったという。一番力を入れたという移動販売では、商品がほぼ完売だったそうで、「大成功してよかったです」と嬉しさを語る。移動販売は、飲食企画の混雑を解決する策でもあった。企画の被りを無くすことができ、年度からの課題を解消できたこともよかった、と振り返る中村さん。多忙の中でも1日に校内を見てみると、昨年より力を入れている団体が

多いと感じたという。錦城生に向けて、オープニングセレモニーへの協力に改めて感謝し「来年ももっと面白く、みんなをワクワクさせるようなことをしていきたい」と中村さんは語る。来年の実行委員に向けて、「もっと早くから動いてクラス企画のクオリティを上げることで、本部だけでなく、周りも活性化させられることをしてくれたいと思います」とメッセージを送った。(普)

野菜で地元を活性化

錦城祭の2日間の間、食堂前でびくずによる小平産野菜の販売が行われた。「小平市を野菜で活性化しよう」をコンセプトに、1・2



原作の世界観に基づいた内装



実際に販売された冬瓜 (提供: 奥嶋先生)

移動販売も大人気!

小平市のお店の商品を錦城祭で売る移動販売は、2日間を通して大盛況だった。「鯛」と思いです」と意気込んだ。



大人気で完売したたい焼き

「錦城添花」をスローガンに、盛大な盛り上がりを見せた錦城祭。準備や運営を通して仲が深まったクラスや部活も多いだろう。今回培ったチームワークを、今後の学校生活にも生かしていこう。

始まりを飾った期待高まるセレモニー

今年、錦城祭で初めてのオープニングセレモニーが行われた。各企画の紹介映像や学校全体のダンス企画の映像が放送され、会場は大きく盛り上がった。

錦城祭本部企画チーフの外山夏莉季さん(21)は「疲れました。しかしオープニングセレモニーが予想以上の盛り上がりを見せて嬉しかったです」と、今回の企画を振り返った。友人からも「思ったより色々あって良かった」という反応をもらえたそう。初の試みが成功したことで、外山さんは「次回の錦城祭にも続けていきたい」と意気込みをみせた。しかし、外山さんはオープニングセレモニーの点呼で時間がかかり、時間が押してしまった、スタンプラリーの景品が思ったより余ってしまった、という二つの改善点も上げた。点呼の確認をしっかりし、もっと錦城生にスタンプラリーの呼びかけをすればより良い錦城祭になったと思いますと語った。そして、錦城生に向けて「このオープニングセレモニーが錦城生の『おお』のすまか』になっていれば幸いです」とメッセージを送った。(英)



個性豊かな企画が盛りだくさん

「後輩が頑張っている姿に元気をもらいました」

錦城OGに突撃インタビュー！！

今年も多くのお客でにぎわった錦城祭。生徒からは「超青春した」「友達との仲が深まった」など多くの感想が聞かれたが、一般のお客さんの声はどうなのだろうか？今回、53回生OGであるY.TさんとK.Hさんに取材をし、錦城祭の感想や印象的な企画を聞くことができた。

錦城生時代は吹奏楽部に入っていたという二人。実は、今もドリルステージにて着用されているガードの衣装を作ったのが、53回生だったそうだ。二人は、今年の吹奏楽部のステージ「KBBドリルステージ」の感想を「年下の子たちが頑張っている姿を見て、元気をもらいました」と話す。また、Y.Tさんは、ガードの旗の振り方が印象的だったそうで、旗をピシッと止まらせる技が多かった自分たちの代に比べて、今は旗をずっとクルクル回す技が多くて驚いたと語る。



卒業生も注目のび〜ず「錦茶」



今年もカラオケ企画もあった

心に残った企画について聞くと、K.Hさんは1年H組の「メイドカフェ REVERSAL」をあげてくれた。慣れない接客にも一生懸命に取り組み、「萌え萌えキュン」の掛け声をする店員の姿が可愛らしかったと話す。最後に、錦城OGの二人に、現役錦城生に向けてのメッセージを貰った。カラオケや水鉄砲など、自分たちの高校時代では考えられない新しい企画に驚いたというY.Tさんは「これからも、新しい企画を錦城に取り入れていってくると嬉しいです」とコメント。また、毎日同じ人と顔を合わせるの実は高校までです、と教えてくれたK.Hさんは「今しかできないことがいっぱいあるので、日々を大切にしてください」と錦城生に言葉を送った。(普)

むらさき草

夏休みに家族旅行で北海道に行った。札幌、小樽、美瑛などを訪れ綺麗な景色と美味しい食事を堪能した。「青い池」や産地直送牛乳のジェラートなど、どれも北海道にしかない素敵なお土産だ。思い出になった。しかし、旅行中ふと思ったことがある。「空港までの道中が一番楽しかった。ただ、旅行前日に荷物をいそいそと詰める作業、当日早起きしてバスに乗り、電車を乗り継ぎ、羽田空港が近くにつれ周りに見えるビルが増えいく様子、いざ空港に着いた時の「始まった」感。このわくわく感がたまらなかった▼思い返せば、まだ北の大地に足を踏み入れていかなかった段階で、未知への期待でいっぱいだった。北海道って涼しいの？何を食べようかな？鹿とかキツネとかって遭遇できるのかな？と前々から北海道での自分の行動を考えていた。「私の考えた最高の旅行計画」、このプランニングが捗る移動時間が、一番モチベーションが高い瞬間だった▼確かに、昔から遠足の前日にワクワクしすぎて眠れないタイプだった。買い物で何を買おうかと悩んでいる瞬間が一番楽しいし、ガチャガチャの何が出るかわからないランダム要素をこよなく愛している▼私の中では、「期待すること」がかなり重要な喜怒哀楽の「楽」の部分だということに気づいた。先日の錦城祭でも、錦城コレクションに推しの先生が出なかったことに少しガッカリしたが、「予想するのが楽しかったからOK!」だって私は期待するのが楽しい人だから。」という風に切り替えることができた▼「楽」が私をポジティブにしてくれる。みんなの「楽」は何だろうか？自分の「楽」が、これから大変になる人生をちよつと助けられると思う。ぜひ探してみたい。(英)

錦城生の青春はまだ終わらない ～2024後夜祭開催～

昨年から復活し、今年も会場を熱気の渦に包みこんだ後夜祭。今号では後夜祭の様子から出演者、裏方など後夜祭を支えた人へのインタビューまで余すことなくお届けする。(編集部共同取材)

大歓声が体育館に響いた2時間

第1部

錦城祭の熱気冷めやらぬ午後4時半、錦城生は入り口で配られたサイリウムを持って、体育館でスタンバイしていた。暗くなった会場で熱狂や歓声があがり、サイリウムが不規則に揺れる様子はまるで本場のライブ会場のようだった。

「カー」の掛け声から始まり、錦城での生活を曲にした「青春構想」を披露した。途中でザ・ブルーハーツのリンダリンドをほさみ、会場をより一層盛り上げた。

続くsince2013は宇多田ヒカルの「First Love」を歌った。切ない歌詞と透きとおるような美声に、色とりどりのサイリウムがスロー調に合わせて揺れた。一転してバンド「狂乱Hey Kids」を披露。速いテンポに合わせて体育館中が一つになり、会場のテンションはマックスに。

会場を熱気の渦に包んだ。そして、パンフレットでは伏せられていた10組目として登場したのは、なんと先生たちのバンド。「青のすみか」を演奏し、会場を盛り上げた。普段では見ることのできない先生たちの姿に会場の熱気は最高潮に達し、体育館を揺らすほどだった。

ステージが全て終了すると、突然カウントダウンの動画が始まった。会場全体が一体となり、声を合わせてカウントダウンをする。0になるとくす玉が割れ、「文化祭お疲れ様でした」と書かれた垂れ幕が現れた。その光景に生徒たちが喜びや感動を味わって



昨年同様、後夜祭のラストを飾ったのは花火
昨年よりグレードアップしているのが印象的だった

後夜祭第2部は、書道有志団体と女サルのスピーカーによる書道パフォーマンスと歌で幕を開けた。「ライラック」が伸びやかな声で歌われ、歌詞が力強い筆の運びで書かれる。双方の団体の魅力が組み合わさった、圧巻のパフォーマンスだった。続くvacantiniは「HE IS MINE」を演奏し、観客への呼びかけで会場を沸かせ、盛り上がりを見せた。室内楽部は、「青と夏」を演奏し、弦楽器の織り成す美しいハーモニーを体育館全体に響き渡らせた。

ステージのラストを飾ったのはmeca+kyone。「B級とHOT LIMIT」のダンスを披露した。息の合った踊りを見せ

いる中、突如怪しげな映像がスクリーンに映し出された。その内容は校長先生が「この学校に爆弾を仕掛けた」と語るものだった。生徒たちは体育館から避難するため、グラウンドへ向かった。

熱狂的な盛り上がりを見せた後夜祭のパフォーマンスがすべて終わった後、校長先生から「爆弾予告」を受けて、校庭に集まった生徒たち。後夜祭実行委員長の掛け声とともに、2日間の祭りを締めくくると、花火が始まった。花火への点火は20人ほどの先生たちで行われ、大きく打ちあがる花火や噴出花火、滝状に落ちる花火などバリエーションに富んだたくさんの花火が披露された。校庭で見ていた生徒からは一発上がるごとに大きな歓声が上がった。「きれい」「大きいね」といった感嘆の声も聞こえてきた。

後夜祭実行委員の永井美鈴さん(2上)によると、打ち上げる花火の種類は後夜祭実行委員が自分たちで決めたという。「風も強かったので心配していましたが、無事に上げられてよかったです」と安堵の表情を見せた。

昨年よりもグレードアップされ、錦城祭を華々しく締めくくってくれた花火。来年以降の後夜祭にも期待だ。

「歓声に圧倒されました」出演者が語る後夜祭

「達成度は85%」実行委員長、後夜祭を振り返る

後夜祭実行委員長を務めた佐藤景悟さん(2B)は、後夜祭の達成度を85%と振り返った。観客から出演団体までが一体となって盛り上がるのが出来ていたことは評価できるとしたうえで、佐藤さんは「自分たちの中では、時間が押ししてしまったことが最大の反省点です」と語った。時間が押ししてしまった要因として、

生徒の入場から後夜祭を始めるまでのタイミングが遅くなったこと、バンド機材の搬入に時間がかかってしまったことを挙げた。「今にしてみればゆとりをもった行程を作ることができればよかつたかなと思います」と振り返る佐藤さん。このように課題はあったものの、生徒から「昨年の後夜祭より良かった!」と言ってもらえることも多いそう。来年の後夜祭に向け

て来年も今年より楽しんでもらえる後夜祭を作りたい、と意気込んでいる。

後夜祭の種目は後夜祭実行委員が自分たちで決めたという。「風も強かったので心配していましたが、無事に上げられてよかったです」と安堵の表情を見せた。

昨年よりもグレードアップされ、錦城祭を華々しく締めくくってくれた花火。来年以降の後夜祭にも期待だ。

「映像で人を楽しませたい」映画研究部も後夜祭に協力

後夜祭のオープニングムービーを作成した映画研究部の山中愛優奈さん(2上)にお話を聞いた。ムービーを製作したきっかけは、後夜祭実行委員の友人に頼まれたことだそう。映像編集のうまさまで人を

山中さんは、実際に自分の作った映像が流れるとき、あまり映像に自信を持っていなかったため、映像が流れるのが怖かったそう。でも、前奏でみんながペンライトを振ったり、掛け声を出してくれたりして盛り上がり、それが本当にうれしかった。そして、「感動で泣いちゃいました」と笑顔を見せた。また「引き受けてよかった」と達成感に包まれたという。最後に「あの場で楽しく見てくれた方、盛り上がりくれた方、本当にありがとうございます」と締め括った。(風)



司会の三人が客席近くを歩き、盛り上がった会場

「達成度は85%」実行委員長、後夜祭を振り返る

後夜祭の種目は後夜祭実行委員が自分たちで決めたという。「風も強かったので心配していましたが、無事に上げられてよかったです」と安堵の表情を見せた。

昨年よりもグレードアップされ、錦城祭を華々しく締めくくってくれた花火。来年以降の後夜祭にも期待だ。

「歓声に圧倒されました」出演者が語る後夜祭

後夜祭の種目は後夜祭実行委員が自分たちで決めたという。「風も強かったので心配していましたが、無事に上げられてよかったです」と安堵の表情を見せた。

「映像で人を楽しませたい」映画研究部も後夜祭に協力

山中さんは、実際に自分の作った映像が流れるとき、あまり映像に自信を持っていなかったため、映像が流れるのが怖かったそう。でも、前奏でみんながペンライトを振ったり、掛け声を出してくれたりして盛り上がり、それが本当にうれしかった。そして、「感動で泣いちゃいました」と笑顔を見せた。また「引き受けてよかった」と達成感に包まれたという。最後に「あの場で楽しく見てくれた方、盛り上がりくれた方、本当にありがとうございます」と締め括った。(風)



会場に一体感をもたらす演奏

ステージが全て終了すると、突然カウントダウンの動画が始まった。会場全体が一体となり、声を合わせてカウントダウンをする。0になるとくす玉が割れ、「文化祭お疲れ様でした」と書かれた垂れ幕が現れた。その光景に生徒たちが喜びや感動を味わって

ランウェイの裏側を岡田先生にインタビュー!

1年生の部でジャズミン役を演じた岡田篤先生は、「生徒のリアクションが大きく楽しかったです」と感想を話す。企画から撮影、編集まで全てを担当した岡田先生。担当学年に関わらず、全校生徒の楽しめる企画で盛り上げることに決めたのだそう。所作や声が女性らしくなるように心がけたという。ウィッグの髪型は、生徒がセットしてくれたものさうだ。

岡田先生は今回、多くの人から貰った「かわいい」というコメントがとても嬉しかったと話す。錦城生に向け、「人の自己肯定感を上げられるような言葉は、沢山かけてあげた方がいいと思います」と言葉を送った。(普)

興奮120%のプログラムを

今回の錦城コレクションには昨年はなかった映像を使った演出などが加えられ、協力してくれた先生の数も30人と去年に比べて増えている。生徒会長の山田拓仁さん(3E)によると、後夜祭でパフォーマンスを披露するために一般生徒はオーディションを勝ち抜いて出演できるのに対し、生徒会企画はオーディションなく、25分間もらえる。その25分を「やらなきゃいけない」というスタンスで使うのではなく、内容の濃いものにし、最初から最後までサプライズなどで興奮120%のプログラムを作ることを意識したと話した。

準備は4月から始まっており、入念に進めていく中で、後夜祭実行委員との連携がなかなかうまく取れず、先行きが見えない不安を感じたり、錦城祭の直前まで登場する先生が決まらなかったりと様々な苦労もあったという。そんな中で後夜祭を終え、「生徒会全体としてはこの代でやる最後の仕事でもあったので悔いなく終わってよかったと思います」と振り返った。

来年の後夜祭については「二年生がやることなのであまり口を出すものではないですが」と前置きをした上で「今回と全く同じものではなく、もっといろいろなことをやってみてほしいです」と期待を語った。(風)

「歓声に圧倒されました」出演者が語る後夜祭

後夜祭の種目は後夜祭実行委員が自分たちで決めたという。「風も強かったので心配していましたが、無事に上げられてよかったです」と安堵の表情を見せた。